シンポジウム要旨集

第１部　中央アジアのイスラーム文化

K.フダイベルガノフ（Камилжан Худайберганов：ヒヴァ・イチャンカラ国立歴史建築保護区博物館・筆頭専門家）

「大空の下なる博物館都市ヒヴァ」Хива― очиқ осмон остидаги музей шаҳар

ウズベキスタンの古都の一つ、ヒヴァの「イチャン・カラ」国立歴史建築保護区博物館は、「大空の下なる博物館」として知られてきた。そこには毎年、世界 80 カ国以上から旅行者が来訪する。

ヒヴァにおける最初の博物館は 1920 年 4 月 27 日に開かれ、1969 年にはヒヴァ「イチャン・カラ」国立歴史建築保護区博物館が創設された。1990 年 12 月、ヒヴァ市の「イチャン・カラ」(「内城」の意）はユネスコの世界文化遺産に登録され、1997 年にはその 2500 周年が世界的に祝われた。

「イチャン・カラ」の総面積は 26 ヘクタール（400m×650m）であり、そこには 54 の遺構が存在する。城内には 350 世帯、2500 人の住民が暮らしている。

そこにはまた、歴史、文化、芸術、手工業にかかわる 15 の博物館が所在する。博物館の基本的任務は、建築遺構の保存、その歴史の研究と広報宣伝、ならびにそれを元の状態のまま未来の世代へと伝えることである。

同保護区博物館は、ヒヴァ・ハン国のイスラーム法廷文書の研究に関して京都大学出身の歴史学者たちと 20 年来の研究協力をおこなっている。また、日本の研究者たちとの協働により、保護区内の遺跡への地下水の影響を調査するとともに、これらの遺跡保存に域内住民が持続的に参画するための道筋をつけるべく取り組んでいるところである。

（木村暁訳）

R.M.ムスタフィナ（Раушан Мухамеджановна Мустафина：ユーラシア国立大学教授）

「カザフ人の生活にいきづくイスラームの様態と前イスラーム的な世界観の名残（民族誌学のフィールド調査資料から）」Некоторые аспекты бытования Ислама и реликтов доисламских мировоззренческих традиций у казахов (по материалам полевых этнографических исследований

近年の民族誌学のフィールド調査によって、人々の生活に根づいたイスラームの様態や前イスラーム的な伝統の名残と実践、また現代のカザフ人の宗教における諸傾向が明らかとなった。新しい民族誌学資料に基づいて、現代カザフ人の宗教生活のたしかな姿や宗教施設およびイスラーム教育機関の活動、聖者崇敬の伝統、ならびにカザフ人の家族儀礼の特徴を描く試みがなされている。最近観察されている傾向は、モスクと民族的な環境との活発な相互作用である。いたるところでカザフスタン・ムスリム宗務局の主導する「宗教

と伝統」プログラムを実現する方策がとられている。このプログラムは、カザフスタンにハナフィー派のイスラームを広めることを使命としているが、ハナフィー派のイスラームとは何世紀にもわたってカザフ人の民族的な環境と相互関係を育んできたものである。民族誌学の研究は、現代におけるカザフ人の聖者崇敬の伝統や日常的な家族儀礼の特徴を解明している。（小松久男訳）

第２部　中央アジアの教育と文化

A.E.クバトヴァ（Айида Эсенкуловна Кубатова：クルグズ共和国科学アカデミー・歴史・文化遺産研究所）

「クルグズスタンにおけるジャディード運動―その遺産の過去と現在における歴史的な意義」 Джадидизм в Кыргызстане: историческая ценность их наследия в прошлом и современности

現代のクルグズスタンにおいて社会生活のすべての領域を綿密に検討して正当に評価し、精神的な価値を再生することは、最重要の課題の一つである。トルキスタンの民族知識人の指導者たちは、かつて[20 世紀初頭の]政治と文化の発展期にあって教育方法の改善と次世代の教育のための手段を求めるようになった。そのために彼らはムスリムの学校、すなわちマクタブ（初等学校）とマドラサ（高等学院）の再編に着手したが、それは後の民族知識人の形成に大きな意義を有した。トルキスタンの政治と文化におけるジャディード運動の意義と役割に注目する必要がある。

20 世紀初頭、カザンやオレンブルグ、ウファの世俗主義的な学校で教育を受けようというクルグズスタン出身の若者たちの数は増えていった。ウファのガリーイェ・マドラサに学んだ者の中ではマンベタル・ムラタリン、ナドゥルクル・アビロフ、トクトナル・チュングシェフ、イスハク・カナトフ、I.アラバエフ、O.スドゥコフ、K.シャブダノフらが知られている。アラバエフとウファのクルグズ人学生の熱意により 1911 年カザンで詩人モルド・クルチの作品『地震譚』が単行本として出版された。この作品は、1910 年にクルグズスタンを襲った地震を題材としたものである。続いて最初のクルグズ人歴史家オスモナール・スドゥコフ(1875-1940)が、自身最初の歴史研究をものし、1907 年カザンで『クルグズの歴史』、1913 年オレンブルグで『クルグズ簡史』、1914 年ウファで『クルグズの歴史とシャブダン一族』、を刊行している。民族の歴史を解釈したこれらの著作の出現は、クルグズ人の民族的な自覚のめざましい成長を物語っており、このうち『クルグズの歴史とシャブダン一族』が今日に伝わっている。

現クルグズスタンの領域に新方式学校が現れるようになったのは、20 世紀初めのことである。最初の新方式学校は、1901－1902 年にピシュペク（現ビシュケク）、トクマク、プルジェワリスク（現カラコル）にできた。注目すべきは、カラコルの新方式学校は当時まだ存命であった[新方式学校の創始者]イスマイル・ガスプリンスキーの名前を冠していたことである。

ムスリム聖職者は、これらの学校を旧方式（カディーミー）学校の危険な競争相手とみなしていた。指摘しておくべきは、このような対立の構図は新方式学校が開校されたところではどこでも見られたことである。しかし、クルグズスタンではトルキスタンの他の地方とは異なって新方式学校は人々の多くから支持を受け、地元のマナプ[部族首領]の資金で建てられた。これはクルグズ共和国科学アカデミー手稿フォンドに残されている多数の文書資料と手稿が証明している。たとえば、1909 年チョン・ケミンに地元のマナプ、シャブダン・バートゥル・ジャンタイがシャブダニーヤ・マドラサを創設し、1914 年クルトカ村にカルパ・アジュが、1909 年イッシク・クル盆地にチュヌバイ・ウール・バラカンが、レ・コルにマナプのジイデバイが、トン郷のトーラ・スーにサガアル・マナプ・マル・ウールが学校を建て、1911 年ジュムガル盆地に「クルマン学校」などが生まれた。

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて精神的な遺産を守りつつ社会制度や人々の生活と意識を変革しようとしたジャディード運動とソ連からの独立後に生じた現代のクルグズスタンにおける再生のプロセスとは響きあっている。このことはこの重要な歴史的プロセスについて現代の諸条件の下でさらに研究を深め、そこから未来への教訓を引き出すことを求めている。（小松久男訳）

N.V. マトヴェエヴァ（Наталия Васильевна Матвеева：ロシア・タジク（スラヴ）大学祖国史・国際関係講座准教授）

「タジキスタンの教育システム形成におけるロシアの教育・学術要員の努力―成果と課題」 Усилия научно-педагогийческих кадров России в создании системы образования Таджикистана: успех и проблемы

報告ではソヴィエト・タジキスタンの教育システム形成におけるロシアの専門家・学者たちの役割を解明する。多民族構成のソ連邦における諸民族間の文化的な不平等を解消する課題は、ロシア・ソヴィエト社会主義共和国連邦（РСФСР）によって解決された。ロシアは、共産党の指令にしたがって、自発的に、何よりも自覚的にさまざまな特典や優待、資金的な助成を未発展の諸民族に提供しなければならなかった。これはロシア人やソ連のより発展した諸民族によってなされた。文化革命を実現するにあたっての難題は、現地住民が識字能力を欠いていたことである。そこでの特殊性と障害とは、識字能力の普及が中等・高等教育および学術研究の形成と同時に進行したことにある。ロシアの教員と学者たちの最大の成果とは、初等、中等、高等教育機関網を短期間に作り上げたことである。ソ連時代はロシア語で教育を受けるのに困難をともなうことはなかった。

（小松久男訳）

S.トゥイリエフ(Сухан Алыевич Туйлиев：トルクメニスタン国立音楽院作曲講座上級講師)

「トルクメン音楽の諸旋法」Лады Туркменской музыки（注 1）

トルクメンの民俗音楽に用いられる様々な旋法は、７音からなる。それらは２つに分類

できる：

１．自然旋法（注 2）

２．トルクメンの民族的な諸旋法

１に属するのは、次の３種類である。

а)２ないし３音程から成る民間伝承歌の諸旋法

б)古代ギリシア旋法と同一の諸旋法

в)古代ギリシア諸旋法を、音程の変化によって豊かにしたもの

２の民族的な旋法の名称は、以下の通りである：クルクラル、バシュ・ペルデ、ノヴァイー、クヤマト、ウラク・ノヴァイー、シルヴァン。

多くの東洋諸民族と同様、トゥルクメンの音楽芸術は、プロフェッショナルな民俗音楽（撥弦楽器ドゥタール、擦弦楽器ギジャーク、縦笛ガルグ・トゥイドゥク、叙事詩語りバフシの芸術）と、民間伝承のジャンルからなる。

自然旋法は、民間伝承歌とプロフェッショナルな民俗音楽の多くに見られる。その主音は、ドゥタールの開放弦の音である。

民族的旋法は、プロフェッショナルな民俗音楽に用いられる。

民族的旋法には、古代ギリシア旋法と一致する諸旋法、そして、それらと全音程および半音程の差を持つ旋法がある。たとえば、クルクラルという旋法は増２度を含む。クルクラル旋法の主音は開放弦の音である。

他の民族的旋法の場合、主音はドゥタールの棹上の様々な位置になる。例えば、バシュ・ペルデ＝第１のフレット、ノヴァイー＝第２、クヤマト＝第４、ウラク・ノヴァイー＝第５、シルヴァン＝第７、という具合である。

今回の発表では、クヤマト旋法が、民俗音楽や創作作品においてどのように用いられるかを説明する。

発表ではパワーポイントと動画を使う予定である。

［訳注］

（注１）原文のｌａｄは通常「旋法」にする語であるため、その通りに邦訳してあるが、この文の脈絡では、音の力学を示す「旋法」よりも、単に音を並べた「音階」や「音列」という語のほうが適当である可能性が高い。

（注２）自然旋法 натуральные лады とは、1937 年に「教会旋法」概念の代用としてソヴィエト音楽学に導入された用語で、中世の教会音楽のみならず、全ての音楽について使用され得る概念とされた。これらの旋法は、わかりやすく言えば、ピアノの白鍵を７つ並べてできる音列に等しく、ドからシまでのそれぞれを開始音とした７種類の「旋法」が得られる。各旋法の名称は、ドリア旋法、リディア旋法など教会旋法から取られている（名称自体は古代ギリシア旋法に基づいている）。

（東田範子訳）